

IAGA 京都総会のこと

永 田 武 (地球物理)

今年 9 月 10 日から 2 週間にわたって京都の国際会議場を舞台にして IAGA (International Association of Geomagnetism and Aeronomy) の総会が開かれた。アメリカ不況の影響らしく、アメリカからの出席者中の十数人がどうしても旅費の都合がつかず直前になって出席取消しとなったのがちょっと目立ったが、その他の国々からは予想以上の出席者数にのぼり先ずは盛会だったと一安心したところである。発表論文の内容も私の目からは良い仕事が沢山報告されて私自身は御機嫌な気持ちである。

ただ毎度のことながら一部のアメリカの若手連中の小生意気な苦言が耳ざわりであった。彼等は言う。『いくつかのシムポジウムの中に重複して問題が取り上げられている。重複のないようにすべきだ』と。理窟はそうかもしれない。然し各シムポジウムの企画責任者は、自分の集りを少しでも良いものにしようとして、関係分野の重要な問題をおり込み、秀れた科学者達を招待する。その結果、主題が異なるいくつかのシムポジウムの間にも、境界近くの分野では必然的に重複がおきる。私に言わせれば当然の結果なのである。私がそう言うと、アメリカの若手連中も一応は口をふさぐ。然し、会の総幹事が米国人なので、彼の手許までこのような苦情が届く。すると彼は、執行委員会の席上で、この苦情を披露して「次回には何とか統制しようではないか」等と提案する。

私や欧州系の理事達は、初めの間はニヤニヤして聞いているが、そのうちに米国合理主義的な統制案が具体的に提案されたりすると「角を矯めて牛を殺す」という格言が東洋にはある。」とか「俺たちはミスターニクソンじゃないんだ」などとひやかして葬ってしまった。

さて、この会の組織委員会が学術会議内に設立された頃、私はアポロ月科学の会議のため米国に出かけていて留守だった。帰国したら私は名誉組織委員長とやらに棚上げされていて、その代りに募金委員長となって約 2 千万円の寄付金を集めろと言う。前にも国際会議の募金委員をやらされた事はあるが、その際は茅先生や兼重先生という大物委員長の下に走り使いをしたに過ぎない。だから「私のような小物ではそんな大金は集まる筈がないから、もっと大物の先生を担ぎ出してくれ。私はその下で働くから。」とさんざんごねた。そしたらお前自身で大物委員長を担ぎ出して来いと若い先生方から反撃をくらった。茅先生に頼みに行ったところで一喝されるだけだという予感があったので、先ず兼重先生にお願いにいった。ところが「私は全力を尽して応援してあげるから、貴君自身が委員長として努力しなさい」という返事。それでも決心がつきかねて、今度は元宇宙研所長の高木 昇さんに出馬を頼みに行った。ここでも兼重先生と全く同じ御意向で「兼重さんと私とが応援すればあんなでも大丈夫務まるよ」という返事。こうなればもう仕

方がないので両先輩の格別の応援を得るという条件で募金委員長の大役を引き受ける決心をした。去年の夏のことである。実際、両先輩は実質的に大変有効な応援を下さって財界の大物の方々にも引き合わせて下さった。まず、学界からは茅、兼重、萩原、高木の各先生と宇宙開発事業団の島理事長に顧問をお願いした。財界からは東芝、日立、三菱、日本の四電気会社、日産、三菱重工のロケット関係2社の会長か社長の方に顧問を引受けていただいた。いずれも兼重、高木両先生の口利きのおかげである。新日鉄の永野重雄会長(当時)はかねてから御本人が「しっかりやれ、僕も応援してあげるから」と言われていたので、安心して顧問就任をお願いに出かけたところ、思いがけない障害にぶつかってしまった。会長秘書室なるものがある、その室長から「経団連からは土光、川又の両副会長しか顧問になっていない以上、日本商工会議所の会頭自らが顧問を引き受ける訳には行かん。経団連の植村会長が顧問になるなら日商会頭も顧問を引き受けよう」という言い分なのである。

またまた兼重先生に相談のうえ経団連に日参のあげく、植村、永野両顧問の実現を見た次第であった。このような組織作りの出来上がったところで、改めて経団連の

花村専務理事から寄附金依頼の各社割当て案を指示していただいた。然し「適当なアドバイスはしてやるが、交渉そのものはお前ら自らの責任でやれ」という花村さんの意見である。あたっていただけるしか他に方法はない。幹事の大林君(宇宙研教授)と私とは覚悟をきめた。大口寄附の会社を口説き落す仕事は二人の責任にしようという覚悟である。とにかく半年の間二人揃って頭を下げてまわった。東芝の土光会長、日産の川又社長、日電の小林社長など我々の方が激励されて、かえって恐縮したこともあるが、冷たい言葉をきかされたことも少くはない。何しろ会社の利益には全く関係のない基礎科学の集まりに金をくれというのだから冷たくされて当たり前なのである。

とにかく二人で約千五百万円は集めた。全寄附額を合計すると希望の金額に達した訳である。その時は本当にホッとした。寄附金集めのような無駄話をここに長々と書いたのは、今後日本で基礎科学の国際会議はたびたび開かれるであろうし、その度に理学部門の関係の先生方が大変な苦勞をされるだろうと思うからである。今年の私の経験がその際にいくらかでもお役に立てば幸いと思う。